

独立行政法人 森林総合研究所

<http://www.ffpri.affrc.go.jp>

水土保持研究領域 小川 泰浩

yasuhiro@ffpri.affrc.go.jp



(デザイン) 研究対象が森林、林業、林産業のあらゆる分野にわたるところから、円で全方位型を示すと同時に、職員全体の「和」や広葉樹を表現しています。森林総研の向上・発展・安定を二等辺三角形で表し、針葉樹も表現しています。全体を三区分して、森林、林業、林産業の3研究分野を示しています。黄緑は躍動する若々しさを、濃緑は大地に広く深く根を張った大樹の力強さを表現しています。

1. 森林総合研究所の歩み

森林総合研究所の歴史は、1905年に農商務省目黒試験苗圃から同省林業試験所として改称された日(11月1日)を起点に始まりました。1910年の林業試験場への改称を経て、戦後の林政統一(1947年)を機に農林省林業試験場となりました。1979年に10年以上の歳月を要して、林業試験場は、東京都(目黒)から茨城県(筑波)に移転しました(写真-1)。その後、1988年に林業試験場が再編整備されて森林総合研究所という現在の呼称に代わり、2001年には国の機関から切り離された独立行政法人森林総合研究所となり、2006年から非公務員の法人となりました。最近では組織改編がめまぐるしく、2007年に(独)林木育種センターとの統合、2008年に(独)緑資源機構の業務を継承した森林農地整備センターの設置が行われました。

一世紀を越える時を刻むなかで幾多の困難(組織の改編・戦争による混乱)を乗り越えて現在に至っています²⁾。詳しい経緯は省略しますが、現在も独立行政法人制度が見直される渦中にあります。

これまでに森林総合研究所が輩出した人材は、緑化技術や日本緑化工学会に寄与しています。次章で、水土保持研究領域の歩みと日本緑化工学会に足跡を残した先輩諸氏を紹介します。

2. 水土保持研究領域の歩み

現在の水土保持研究領域は、1911年の森林測候所がルーツとなっています²⁾。森林測候所は治水事業推進するため、各地(39箇所)に設置されました。第二次大戦後に防災部が設立され、1951年には国土保全に関する研究を防災部治山科(本領域の前身)が担当しました。1988年に森林環境部水土保持科へ改組され、2001年に現在の研究領域が誕生しました。



写真-1 筑波移転当時の森林総合研究所²⁾(1978年)

研究所概要

所在地	茨城県つくば市松の里1
設立年	1905年
職員数	1,095人(平成24年4月1日現在)
ミッション	森林・林業・木材産業に係わる研究を通じて、豊かで多様な森林の恵みを生かした循環型社会の形成に努め、人類の持続可能な発展に寄与します

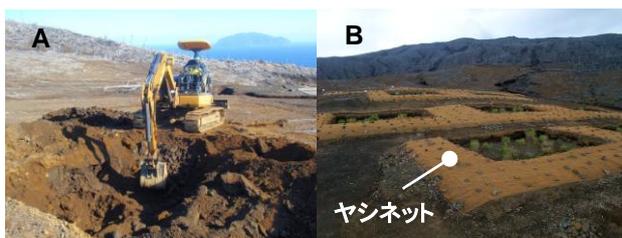
緑化工に関する試験研究や日本緑化工学会の発展に大きく貢献した当領域出身者のうち、倉田益二郎氏(昭和15年～昭和28年在籍)、堀江保夫氏(昭和26年～平成5年在籍)、村井宏氏(昭和27年～昭和54年在籍)、北原曜氏(昭和52年～平成12年在籍)の4名は、特筆すべき偉大な先輩です。

3. 水土保持領域で現在取り組んでいる緑化試験

三宅島では現在も2000年噴火以降の火山ガスで植生回復が遅れている山腹が見られます。そこで、2011年に火山ガス高濃度地域の山腹に対して、火山ガスに比較的強い島内の植物(草本・木本)を縦横サイズが5～7mの穴(バンカー)に導入した緑化試験を東京都三宅支庁と共同で実施しました¹⁾(写真-2)。その結果、1年経過後に山腹に植栽した植物は生き残り、播種した盛土では、草本の発芽が認められました。しかし、盛土に被覆したヤシネット(写真-2B)から芽が露出した草本個体に枯損が発生しました。今後も引き続き生態系に配慮した緑化に関する試験研究を行います。

引用文献

- 1) 小川泰浩・岡部宏秋・黒川潮(2012)日本緑化工学会誌, 38(1), 164-167.
- 2) 森林総合研究所(2005)森林総合研究所百年のあゆみ, 339pp.



A: バンカー掘削, B: 5m×7mバンカー

写真-2 三宅島で実施したバンカー緑化試験